

みほとまほ 山を歩く

極限環境微生物

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西住流では夏に山籠りの訓練を行う。

黒森峰女学園に入学した西住みほも例外では無く、姉の西住まほと一緒に帰省し山に籠る。

みほとまほは山の脅威と戦い、知識をつけ、強くなっていく。

※彼女達は登山計画書を提出しております。

登山計画書（登山届）

2018年8月1日

熊本警察署 御中

目的の山名 根子岳

入山日 8月5日 最終下山日 8月8日 (予備日含む)

氏名 西住まほ

生年月日 平成14年7月1日

性別 女

年令 17

住所電話番号 ●●●―個人情報のため不開示―

氏名 西住みほ

生年月日 平成15年10月23日

性別 女

年令 15

住所電話番号 ●●●―個人情報のため不開示―

目次

第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
34	26	20	13	8	4	1

第1話

「みほ、起きて。みほ」

「…お姉ちゃん」

「おはよう、顔を洗っておいで。水を飲んだら出発しよう」

テントでの睡眠では中々疲れが取りきれない。昨日一日歩き続けたからか足もだけど、山という整備されていない不安定な地形を歩くのはお腹と肩周りの疲労が大きくなる。

猪や鹿、あと恐らく野犬の糞もあつたりするから警戒を怠られないし、ましてや60Lいっぱいのザックを背負えば夜にはクタクタだ。

「みほ、これを見て」

「えっ…。へび?」

テントの収納をしている時に声をかけてきた。

お姉ちゃんの左手に握られて拳の端から顔だけを出している。つぶらな瞳、舌を小刻みに出し体を姉の腕に巻き付けている。

可愛い。そう思ってしまった。

「これはアオダイシヨウだ。朝食にこれを食べよう」

木の幹に蛇の頭ごと拳を押し付け、腰に帯びていたナイフで首を落とした。そのまま幹の筋を伝い血が滴る。

「え？」

みほ、火の用意を。蛇も生食はいけない。しっかり火を通しておこう。

皮は手で剥げる。ただし剥ぐ時は肛門の向きに注意して、排泄物が飛び出して来ることがあるから。皮を剥いたら肛門周りから内臓も一緒にとれる。

「うう……」

いつの間にか二匹目も獲り私に教えるように皮を剥いでいる。それに、お姉ちゃんのおごには血がついてる。さっきまでついてなかったのに。

「頂きます」

「…いただきます。…うう…っ」

初めての爬虫類。白焼きに塩をふっただけ。肉質は固く脂分は感じられない。とても小骨の多いコマイの干物のようだった。

「「ごちそうさまでした」」

テントを片付け、水を飲み地図を見ながら予定の確認をする。

今日はこの位置まで移動しよう。急傾斜は迂回出来るが川越えがあるな。体調が

悪ければすぐに言ってくれ。何か質問はあるか?…よし、出発しよう。

話を聞きながらも、意識は先程の体験へと囚われていた。それほどに衝撃的。きつとしばらく思い出してしまうだろう。

先ほど食べたヘビは首を落とされる瞬間口を大きく開けていた。ナイフが皮膚を破った痛みによるものか、自分を害する外敵と理解した際の威嚇のためか。

お姉ちゃんはとても強い。全く躊躇しなかった。私には出来るだろうか。いや、出来るようにならなくてはいけない。そのための訓練でもある。

ただ、今の私には、何かを傷付けたり見捨てたり奪ったりしてまで得る生に少しの戸惑いがあっただけ。

それでもお姉ちゃんは私のためにも獲って教えてくれたのに、こんな風に考えるのは卑怯だ。自分でも嫌になる。

あと2日。私達はこの訓練で何を学んで、何を得るんだろう。

第2話

日中は気温がすぐに上がる。夏山の中は蒸し暑いが日陰が多く我慢できないほどではない。

しかし虫刺されや草木によるかぶれを防止するために私たちは長袖長ズボンで訓練に臨む。

初めて山籠りの訓練中にカクレミノでかぶれたことがあったから、その事については慎重だ。ウルシでなくてよかった…。

そうそう。訓練っていうのはね、私とお姉ちゃんが中等部の頃から始まった、夏休みにする三泊四日の山籠りことなんだ。

去年まではお父さんやたまにお母さんも居たけど、私が黒森峰女学園に入学した今年からはお姉ちゃんと二人きりになってね。

持ち物として2人用のワンタツチ TENT を1張と2〜3人用ツェルトを1張、救急パックや着替え、寝具、ライト、地図、時計、水を一人20Lまで。それと火をつけるための道具はマツチだけ。食材は持ち込み禁止、調味料は可。

あとはナイフや安全面の配慮としてGPS付き通信機器や非常用の固形燃料も許可

してもらってるよ。

これはみんなも登山計画書を記入してお近くの交番や警察署で提出すれば出来るから良かったらやつてみてね。ネットでの申し込みも出来るようになったけど、コピーを家族か友人に渡しておくことも絶対必要だからね。

—————

ブーーーーン

「・ スズメバチのパトロールだ。みほ、帽子をしつかりかぶって屈んで。タオルを首から下げて目や鼻、口を守って」

お姉ちゃんがすぐに反応した。私はアブやハエとは違う甲高く周囲をぐるぐると回り続ける初めて聞く音に対応が遅れたが、言われた通りにした。

カチツカチツ……カチカチカチ。連続した、爪と爪を弾くような音。

恐怖で地面を見て通り過ぎるのを待っていた私の肩を、お姉ちゃんがゆっくりと押した。

「……警告音だ。巣が近いのかもしれない。この体勢のままゆっくりと来た道に戻ろう」

お姉ちゃんが私の背を押すように後ろに居てくれる。しかし時折近くに聞こえてしまう羽音にいちいち反応してしまう。砲撃による土砂や破片が顔の近くをすり抜け

るよりもずっと不快だった。

「もう大丈夫そうだ。少し迂回する」

10mは移動しただろうか。怖かった。

落ち着かない私の手を握って、お姉ちゃんはとつておきの対処法を教えてくれた。「私は小さかった頃にも追いかけられたことがある。スズメバチは目か上についているから、急に伏せられると標的を見失う。私はたまたま転んで、その際にお母様にスズメバチをなすりつけて助かったことがある」

ちなみに後でお父さんに聞くとお母様はスズメバチを裏手打ちで撃ち落としたりしい。

私がやったらお姉ちゃんになすりつけちゃうよ、刺されちゃうよと言うと「みほが刺されて痛い思いをするより痛くはない」だつてき。

……うう……つ。キyunときてしまう。

お姉ちゃん、やっぱりかっこいいなあ。

私のお姉ちゃんは、自分がやらなければならぬことややるべきことをすぐに察して行動する。それは学園内や戦車道でも同じ。

だからこそ下手なウソはつけないし、やりたくないことは理論立てて回避する。そんな実直な姉の優しい言葉、染み込まないはずがないからずるい。

だけど私、気付いてたよ。私のことを落ち着かせるためにとっておきを話すお姉ちゃんの手も震えていたこと。

第3話

私たちは少し回り道はしたものの、山の傾斜から逃げたルートで進んだ。そして、越えるべき川に直面した時には二人で感嘆の声をあげる。

溪流というには勿体無いほど開けた地形で、遊ぶには丁度いい穏やかで浅い川だったから。魚も泳いでいるくらいキレイで、訓練じゃない時に来たかったな。しかし、飛び石になるような足場は無く、仕方なく靴を脱いでズボンを膝上まで捲り上げて渡ることにした。

「転ばないよう、ぬめりに気をつけて渡ろう」

「…… まっってお姉ちゃん！」

まほの右足、内側の足首とふくらはぎの間くらいに一筋の黒い線がみえた。ヤマビルだ。もう小指くらいの太さまで血を吸っている。

「さつきスズメバチから逃げる時だろうか。ズボンの中でスパッツがズレていたようだな」

(そんな冷静な……)

「こちら側よりも川を渡った先の方が河原になっているから対処しやすい。ひとまず

渡ってしまおう」

ひいひい……。私なら気付いてしまったら気持ち悪くて付けっ放しなんていられないよ。

「みほ、塩をまぶしてくれ」

さつきよりもお姉ちゃんの血を吸って大きくなったヤマビルを、ピンセットで固定している。私はそこに塩をかける。

すぐさま縮み出し、嘔み口が離れる。お姉ちゃんはそれを石の上に置いて、近くにある手頃な石ですり潰し土に埋めた。

血を吸ったヤマビルは卵を産みまた増える。殺すのは血を吸わせてしまった者の責任とかなんとか。

そうしている間にもじわじわと出血している。消毒用のエタノールを塗布し、水に強い絆創膏を貼る

「夜にはもう出血も止まるだろう」

……ドキッ。

ダメだ。絆創膏を貼ったお姉ちゃんが愛らしく感じてしまう。想像しちやダメ。三角巾で片腕を固定し、頭に包帯を巻いて片目が開ききらないほどの青あざがあるお姉

ちゃんを想像して、思わず抱きしめてしまいそうになる。

「お姉ちゃん、準備して出発しよう」

「いや、ここで食料を獲ろう。この川は浅くて水草が多く、魚が取りやすい」

私は早く今日の野営する予定地に行きたかった。

早くスパッツを脱いでガーゼを剥がすお姉ちゃんを見たかったから。

私、訓練中なのにこんな変な気持ちで強くなれるのかな。お姉ちゃんは川で魚を獲るため、ザイルにテグスで自前の網シャツー高機能メッシュアンダーシャツだと思いたいーをくくりつけ、たも網を作り上げた。

「出来た。しかしたも網にしては少し目が細かくなってしまったな。まるで虫取り網だ」

「これならさつきのスズメバチもやつつけられるね」

テグスで出来た網が先っぽになるよう流木に巻きつけて自作のたも網を作った。それに少し興奮気味の姉に乗っかって強気な冗談を言ってしまった。

あ、しまった。お姉ちゃんの顔はやつてもいいなという表情。

「じゃ、じゃあ、合図をくれたら追い込むね」

「よろしく頼む」

上流に回り、お姉ちゃんの顔を見る。たも網を振り上げコクリと頷いた。

私は上流から下流の水草が茂る場所に向かって歩く。その下流の先にはお姉ちゃんが待っている。追い込み漁とは言えないが猟師のよくやる勢子と待子の関係だ。

打ち合わせしていた地点に着くとお姉ちゃんは水草の付近をガサガサすると魚やカニがたも網に入っていた。これで釣りよりは短時間で沢山捕まえられる。最初は生き物があるだけで楽しくて喜んだけど、これ生き抜くための作業なんだよね。魚しか獲らないようにしてあととは逃した。

今日の昼食と夕食には出来そうなくらい獲れた。少し小さすぎるかなというのも居るのは逃してあげた。お姉ちゃんは少ししぶったけど、未来の人達に残してあげたいと言うと納得してくれた。

獲れた魚の頭を石で叩いて殺し、腹を裂いて内臓を抜き水で洗う。夕食の分はジツプロックに入れパッキングする。内蔵などの残渣(ごんさ)は地面に埋めるようにして処理をする。

私の持ってきた淡水魚の凶鑑を見ながら、二人で焼く。ここで獲れた魚はアマゴ、ヤマメ、オイカワ。細い枝に刺して焼き、塩や醤油をかけて食べた。

「いたadakimasu」

川魚特有の臭みはある。しかもしょっぱいだけの味付け。でも、それでも、美味しかった。美味しいとしか思えなかった。なんだか分からないけど、今になって急にだけ

ど。何かを食べて生きていることに感謝したくなった。

「美味しい。美味しいね」

「うん。本当に美味しい」

「私、もう食べ物を残すのやめるね。もうやめようと思う」

「……そうだな。感謝して頂こう」

お姉ちゃんはハッと気付いたような表情をしたけど、すぐに優しく微笑んでくれた。

「ごちそうさまでした」

既に飲み水を使い切った空のボトルに川の水を入れ、パッキングした魚を出来る限り冷やして持ち運ぶことにした。せっかく減った重量だったが食料は貴重だし、悪いものを食べて体調を悪くすれば最悪の場合、自力で動けなくなる。それは避けなくてはならない。

今度こそ出発だ。たも網を片付けながらお姉ちゃんと言う。

私は、お姉ちゃんが殺したヤマビルを土に埋めた気持ち少し、分かった気がした。

第4話

木に囲まれた場所にいると景色の変化が乏しく時間経過は遅くなったかのように感じる。

しかし山での夜は足が速い。地形によっては夕日さえ差し込まずにすぐ薄暗くなり、そして夜になる。

目が効かない夜は人にとって非常に危険だ。暗く不安定な地形を歩けば足を挫き、周りを見回すだけで堅い枝を払ってしまい怪我をする可能性も高い。

だからこそ、明るいうちに野営の準備をする。

ライトを使うのはテントの中だけでいくらいに早く準備をするのが大事。ぜんぶお姉ちゃんの受け売り：私の解釈もあるけど。

そういう訳で今日の野営地に到着した。山間にある少し開けた平地、森林限界ほどの標高ではないため、平原になっている。私たちは乾いた草の無い場所を探しテントを張ったら薪を集める。

薪を拾うと言っても夏場によく乾いた木は少ない。そういう時は腐って折れた木を探せばいい。生きていない草木は水分が抜け乾くため良い燃料になる。

あとは薪を拾う時はナイフ、出来ればナタ。それと袋もあつたほうがいい。大きい枝は切らないと持てないし、そのまま抱えると棘（トゲ）やささくれで怪我をする可能性がある。

そーです。これもお姉ちゃんの受け売りです。

お姉ちゃんは人前では口数が少ない。でもみんなは勘違いをしている。たしかにイメージ通り、1を聞いたら10を知るような人ではあるけど、それを人に押し付けたりはしない。

西住家の長女であり西住流の体現だからだ。お母さんの跡を継げるのは、間違いなくお姉ちゃんだけ。そしてその地位から放たれる言葉の力と責任の重さを理解しているんだ。

でもでも、私と二人きりの時だけは、穏やかな顔を見せ柔らかな言葉を紡ぐ。

お姉ちゃんに守られっぱなしの出来の悪い妹。それでもお姉ちゃんを振り回す時だけは普通の家庭によくいる姉妹で居られる気がするから。私はこれで良いと思つてたりもする。こんな考え方、お母さんにバレたら絶対怒られるけど。

嫌な気持ちだ。私はいま、追いつめられている。

しかし抜き差しならない状況。私はズボンに手をかけまらずは一枚、地面へと下ろす。日の光で黒いコンプレッションタイツが艶つと光り、奥にあるカメラア色のメッシュパンツが透ける。

今ならまだ戻れる、私は人間だ。そう一瞬頭によぎったが、この先に逃げ場などない。女子なら、自分がこれからする行為に嫌悪感はずがある。それでも、タイツとパンツを一気にずり下ろしその場にしゃがみ込んだ。

いや、何か嫌な予感がする。下半身はそのままに、上半身だけで後ろを振り返ろうとした時には既に声をかけられた。

「みほ、そろそろ薪は集まった……か……」

「あつ。ぎゃあ！ 向こう行って!!」

……あーもう最悪だよ。乙女が恥じらいを押し殺してまで決意した、決死のお花摘みをわざわざ見に来るなんて。見つからないよう隠れてたのにそんなところで能力発揮するな。

「排便の際は持ち帰るように」

立ち去りながら余計な情報まで漏らさないでよお。ぐすつ。

「……」

羞恥心というものが芽生えてから初めての屋外排泄は高校一年生の時になるみたいだ。覚悟を決めた時はできる気がしたのに、お姉ちゃんに見られ一度緊張してしまうとなんか出てこない。

しかもこちらは急所を丸出して自然に晒すという危険な状況。例えるなら敵車両を目視で確認しているのにキューポラから体乗り出している状況だ。なんだそれならいつもやってるって私は何を考えているんだ。

早く済まさなければやられる。この焦燥感のせいでうまく出ない。そもそも音出るのも嫌だし。

…ピトツ。

「あつ」

「お姉ち、やああああん！」

「どうしたみほ！ ……!?」 真正面から来る姉。目を見開いて私を見ながら狼狽える

姉。「え？ え？」

「お願いおしりを見でええええ！」

私の言葉でお姉ちゃんは一気に青ざめた顔をする。

「え？　え？　い……いやだ……え？」手を口にあてて拒絶の意思を示す。

それもそうだ。私はいま脱糞失禁しながらお姉ちゃんにおしりを見てとお願いをしている。

あつ。お姉ちゃんはそう言つて私の後ろに回つて、おしりにくつついていた何かを取つてくれた。

「みほ、カエルだったよ。ごめん。すぐに気付いてやらなくて」

「ううん。こつちこそごめんね。それとまたお願い。向こうに行つて欲しい」

恐ろしく冷静な物言いにお姉ちゃんも察したように黙つてカエルを持って歩いて行つた。ていうかあのカエルでかすぎでしょXperia Z Ultraだよ。

—————

「お姉ちゃん。薪は集まつたよ」

「あ……ああ、ご苦労」

分かりやすいくらい気まずそうな顔。何か言わなきや。

「さつきはありがとう。お姉ちゃんが居なかつたらもう一生外でトイレができなくなる
ところだったよ。だから本当にありがとう」

「あはは、普通の女の子は野外排泄なんかしないよ。……あつ」

「このお姉ちゃんは……なんで勝手に失言して気まずそうにするの……」

「みほ。戦車道を嗜む乙女なら覚えておくといい。土壇場を乗り切るのは、勇猛さじゃな「そういうのはいいよ」

格言でお茶を濁そうとする態度に少しムツときた。

「もうお姉ちゃんは私のはしたない姿をを一生忘れずに笑って生きていくんだ。きつと誰かにこのことを言いふらして大笑いするんだ」

「しないよ」

「私がこれからお母さんに叱られてる時も戦車道で失敗した時も、あの時の姿を思い出してうんこ垂れに怒ってるよあの人。って心の中で思い続けるんだ」

言つて後悔。でも止まらなかつた。

私の目には涙が溜まつてる。鼻声になつてきたのも自分でわかる。なんとか塞き止めてる関が崩れたら、声を出して泣いてしまふと分かる。だから、頑張つて我慢をする。

「ふふつ。絶対そんなこと思わない。私は西住まほだぞ」

「いついま笑つた!?! お姉ちゃん最低!! もうやだあつ!!」

あーあ。決壊させられた。

「泣かないでみほ。私はみほのお姉ちゃんなんだ。だから、大丈夫だから」

「全然意味がわかんない! 私には笑つたことに対して怒ってるのにいつ!」どんとお

姉ちゃんを押し付ける。もちろん全力ではない。

「すいませんっ、ちよつ、薪拾い中ですので……暴力は……」

「その心笑ってるね!? このハゲー!!」

「あはははは!」

「許したと思うなばかー!!」

—————

お姉ちゃんはずばらく笑い転げた後に、急に真面目な顔をして私の肩を抱いて言った。私は何があつてもみほの味方だし、みほのために最良を尽くすと決めている。だからいつもみほに、仲良くしよう。だってさ。

困るよね、いきなり大人っぽくなられても。なんかもう、許すしかないもん。

今日もじきに暗くなる。火を起こしてお昼に獲った魚を食べる。

お姉ちゃんは何匹か捕まえていたカエルを捌いて足を焼く。少し水っぽいけど鶏も肉みたくないな食感で美味しい。けど、美味しけど……!

……お腹が減るよりは良い。そう割り切るくらいには成長したみたい。

……普通の女の子か。ははは。変だな。うまく笑えねえや。ぐすつ。

第5話

私は夜の山は嫌いではなかった。虫達の合唱に風で揺れる草木の乾いた擦過音、そこに鳥の声が加わる。場所によつては上流の川や滝の力強い音の波も聞こえる。

つまり、耳に優しい雑音が集まり賑やかなの。そこまで人付き合いの上手ではない姉には意外と落ち着くのではないだろうか。

ごめんなさい、私も落ち着きます。

ちなみに夏山だけど、実は街の中よりも夜はずっと涼しかったりする。

海拔0 mから標高が1000 m高くなると気温は約0.6℃下がる。1000 m高くなると約6.5℃下がることになる。ここは標高が1600 mほどだから、街中よりも10度は気温が低い。

更に言えば、金属やアスファルトみたいな太陽の熱を保持する物質が少ないため、体的には春の日中程度の暖かさかな。

つまり、湿気さえなければ快適な気温になる。この時期は梅雨明けでも少し蒸すよね。

もう外は暗くなっている。個別でテントがあるのに、今はお姉ちゃんのテントで水を飲んで寛いでいた。

この訓練は災害時の対策もあつてか、二人とも2〜3人用のテントを持って歩く。これがまた重い。

二人で1日の汚れを落とすためにお互いの髪をブラッシングして汚れを浮かせる。そしてドライシャンプーを自分の頭皮に塗り込み、洗淨したら乾いたタオルでふき取る。すつきりー。

私たちはジェルタイプを好んで使う。成分としてはアルコールとメントールが入っているが、そこにミントの香りが入る製品の方がなんとなくすつきりする。ジェルは他のよりも香りが強い気がしたのでこれを用いることにした。

お湯で流すシャンプーみたいに髪の毛の油脂は落ちないんだけどね。

そして汗拭きシートも欠かさない。お姉ちゃんはメンズ用のボディシートでガシガシ拭き取る。これもメントールが入っているので使用後は涼しいらしく気持ち良さそうだ。

私は肌が敏感だから、からだふきシートという低刺激のもの愛用する。二人とも下着の中にも丁寧に手を入れ後から気持ち悪くならないように全身をくまなく清潔にする。

そうしたら寝るときはノーブラで化学繊維のサラツとしたTシャツと短パンに着替える。下は汗蒸れしないインナーを着ているからね！

さあ、私にとってはお待ちかねの時間。お姉ちゃんはが絆創膏を剥がすようだ。

肌が引つ張られ痛いのかゆつくりと剥がしていく。だんだんと見えてくる蒸れたこととでぶつくりとした白くふやけた肌。噛み跡はしつかりとふさがっており、そこもボディシートでしつかり拭く。

「お姉ちゃん、お願いがあるの」我慢できない。返事を待たずに続ける「ちよつと触つていい?」

「もう傷も塞がってるからいいけど」

そんな珍しいかなあと言った表情。私は勢いよく抱きついて押し倒した。

「えっ。……どうしたの、みほ、暑いよ」

「ちよつと触るだけだもん」

ぎゅううううつと抱きしめた。私分かってるよ。化繊のシャツに顔をうずめてるからそんなに暑くないでしょ。

「私ね、お姉ちゃんが傷の手当てをしている時に、ボコの姿を思い浮かべちゃったんだ」人に抱きつくのは気持ちいい。抱きつかれるのはもっと気持ちいい。安心する。お

姉ちゃんもそうだといいな。

私は何でもないようにくつついて、何でもないように実る乳房の先をめぐけて息を多めに吐きながら喋る。

「みつ……みほ。暑いから普通に話そう」

冷静を装うけど、声色から察するに表情は下唇をかみしめるような切ない顔になってるんだろいな。

「ううん。私が安心するから。お願い、このまま。……続けるね？ あんまり想像は

出来ないけど、お姉ちゃんがもしも、どうしようもないような絶望的な状況になったとします」

お姉ちゃんは私の話を聞きながら、呼吸は整わない様子。細かくふつ、ふつ。と音が聴こえる。

「そんな時でも、絶対にお姉ちゃんは諦めたりしない。逃げずに立ち向かって、必ずそんな状況を覆す力がある。今までだって私から見ればそうだったの」

「っ！……ふつ……くうっ……」

お姉ちゃんの体がハネる。あーしまった。唇が先つぽを擦って当たってしまった。

スイッチが入ったみたいで、山のとつぺんの方に喋り掛けるだけで体がハネるようになってしまった。

もう！ お姉ちゃんが時々、私のことを弱々しく引き離そうと抵抗するから。私は気付かないふりをして続けるけど。

「もしもお姉ちゃんがボコだったら、ボコも救われるのにつて思っちゃったんだ。別にボコが目的を達成できないから苦しんでるつて訳ではないけど」

女の子なら誰だつて知ってる。化学繊維の上から乳首を触られると気持ちいいつてこと。

もし軽く引つ搔くように刺激されると信じられないくらい気持ちいいつてこと。……やつてあげないけど。

「だからね、帰ったらお姉ちゃんにはボコになつてもらいます！ 決めました！」

胸から顔を離さないで見上げると、思った通りの表情をしたお姉ちゃんがいる。

「う……うん？」

「絶対だからね！ いま約束したからね」

私はここで、いたずらつぽく笑つて体を離れた。これで私のセクハラによるお昼の仕返し（逆恨み？）は終わり。

お姉ちゃんは私の意図には気付かず悶々とした夜を過ごせばいい。もし自分ひとりで致そうとしたら、また偶然を装つて勝手にテントに入ってやるぜ。

それじゃあ明日は予定通りにね。そう言つてテントから出て行く。

気恥ずかしそうに見送るお姉ちゃんの顔は完全にメスになっていた。ちよろいなあ。

いつもより寝返りの音の回数が多く落ち着かない様子だったけど、しばらくすると大人しくなり寝息が聞こえて来た。ちつ。

さすがお姉ちゃん。自制心が強い。

私も寝よう。そう思う前から寝袋（シユラフ）の上でうつらうつらと意識が途切れていく。明日はちゃんと自分で起きないと。

人の声はなく、聞こえても何も考える必要のない雑音で頭を満たしてくれる賑やかな夜。一日の疲労も相まって、今夜はよく眠れる。

消えゆく意識の中で、虫達や草木の合唱に混じりどこかで犬の遠吠えが聞こえた気がした。

第6話

「みほ、起きて。準備をしよう」

「んー……おはようお姉ちゃん」

今日で3日目。からだふきシートで顔を洗い髪を梳（くしけず）る。行軍ルートとしては山を越えて木々の深く広い森へいく。シンプルな行程。

今日は歩いて歩いて歩きたおすことになる。

ちなみにその森を超えると、農村地帯に出るようになっていく。予定としては森の中で一泊し、明日はその森を超えて農村地帯の大きな国道まで出たらお父さんに連絡することになっている。

そして迎えに来てもらって訓練終了。お姉ちゃんが考えたルートだったので信頼しているし、地図を見る限りこれから川越えや沢下りはしなくていいみたいだった。

！
それじゃあ朝のお着替えタイム。私はパジャマ代わりにTシャツと短パンを脱いだ

説明しよう。登山における服装とは即ちRPGにおける防具なのだ。

人が受けるダメージには、切創や擦過創、打撲創、刺創、熱傷などがある。

それを防ぐには重く硬い防具を揃えるしかない、しかし！

現実の登山には通気性や着心地、快適性という魔法防御力が求められる。これを実現したのがアウトドアウェアなのだー！

ここからは私の魔法のような防具の数々を見ていただきたい。

まずはインナー。肌に直接触れ、デリケートなゾーンを優しく守る超重要防具だ。

ここは蒸れないよう通気性があり、汗をかいた時もすぐに乾くような吸水拡散性の高い物を選ぶ。おすすめはジオライン・メツシユで出来たもの。

ジオライン・メツシユ ソフトブラ E

ジオライン・メツシユ ローライズシヨーツ E

……調べて貰えばわかるけど、ローライズのシヨーツが全部、みんな想像するような可愛いデザインな訳ではないからね！

次にタイツ。これも肌に触れる面積が多いからしっかりと装備を選ぼう。

私達姉妹は、長い袖と裾のコンプレッションウェアを好む。その中でもオススメは

……。

ヒートギア トップス E

ヒートギア ボトムス E

このタイツでは長袖長ズボンを着なくとも素肌を日差しや毒虫毒草、草木の枝や棘から保護することができる韌性があり、尚且つヒートギアは速乾性にとっても優れていて、半袖Tシャツでいるよりも涼しいと感じる。山の上では汗に濡れたまま風に晒されると寒いくらい。

また、程よく体を圧縮（コンプレッション）してくれることで余計な振動を抑えることで疲労を減らし、スタミナの維持をサポートしてくれる。

まさに物理面（ハード）や魔法面（ソフト）でのステータス補正を期待できる。

ちなみに上下とも黒色を着てみればガンツスーツの完成。ちよつと恥ずかしいけどかっこいい。ガンツスーツかっこいいよね!?

肌着の仕上げとして、靴下を装備する。ここで私たちが選ぶのは……。

メリノウール トレッキングソックス E

これはメリノウールで出来た登山用の少し厚手の靴下。

メリノウールは、汗を吸収して外に発散する力もすごいけど、どれだけ汗をかいたまま時間が経つても、嫌な臭いが発生しづらい私の大好きな。これこそ魔法の素材。

臭いが出ないのは自分の精神面にも大きく作用するから本当に使いやすい。化学織

維の靴下の方が早く乾くけど、すぐにおいはしちやうから。

続いてズボン（ボトムス）を装備する。

トレッキング グパンツ E

この防具はとつても種数が多く好みに分かれるんだ。

女の子ならコンプレッションウェアの上にスカートや可愛いシヨートパンツを選ぶかもしれない。そこはお任せしよう。

ただし、絶対に必要なのは撥水性が高く、丈夫な素材で伸び縮みするもの。

もしあればポケットのどこか一箇所でもいいから防水ジツパーになっているのがオススメ。急な雨にも対応しやすくなるね。

トップスも綿やデニム以外の素材でお好みで。

ポリエステル素材の長袖シャツ（パステルカラー） E

だつて色が可愛くて、腕まくりすると涼しいんだもん。

ちなみにお姉ちゃんはメリノウールとポリエステルを合わせた素敵素材のポロシャツを着ているよ。

あ、登山の防具としては、綿（コットン）素材やデニムの衣類はあまり向かないんだ。

着心地の良さやデザインは抜群だけど、濡れると乾かないし重くなる。私はタオルくらいしか綿は使わないかな。

そして足下にはもちろん……

登山靴 E

値段は張るけど、靴底（ソール）を張り替えれば一生ものとして使える。何より、機能的で見た目も美しいんだ。

ゴアテックスによる高い防水性、そして透湿性のおかげで汗をかいたとしても水分を外に逃がしてくれる。新品なら撥水性もピカイチ。そしてメリノウールの靴下と相性がとても良い。

もちろん靴紐も強靱な素材が使われ使用されていて濡れにくく、カラーリングやカラーパターンも豊富で可愛い紐を選べる。黒と赤のモザイクパターンに黄色の差し色とかすつごく可愛いよね！

更に、登山靴は足首をかたく固定し保護する作りになっている。

そのため訓練すれば山のような不整地でも足を挫くりスクを減らし、更には歩くためのエネルギーを効率よく推進力に変換出来るようになる。

無骨な見た目から、山の安全靴とも言われる（わたしが言ってるだけかも）

あとはアクセサリだ。

ジャングルハット E

コカゲシールドグラブ E

夏は日差しが強く、短時間でも肌が晒されれば大きく体力を削られる。私はジャングルハットを着用し、お姉ちゃんはワークキャップを被る。

コカゲシールドグラブはなんかすごい涼しいグローブ。防水性にはかけるけど、遮熱効果が高くて日焼けも防止できる。歩いている最中に草木を触っても手が傷つかないから便利だよ。

これが私達姉妹のコーディネートもとい防具一式になります！

……可愛い？ にひひ。ありがとう！

—————

着替えも終わり、やる気は十分。

そして残りの水は二人合わせて20L。半分は使ったけど、これなら明日まで持つ。

こういう心の余裕は山での行軍には非常に重要だ。

……食べ物現地調達なのがとても苦しいけど。

少し話は変わるけど、山の中で最大の脅威ってなんだと思う？危険な生き物や食料不足、はたまた落石？

私は水分だと思う。

水分に侵されれば夏でも体が凍えるし、乾かすための熱も出せなくなる。雨が降ったらなおさらだ。

そして人は、濡れた服を着たまま体力を回復することは出来ない。つまり休んだり眠ることが出来ない。思い返すには辛い記憶だけど、少なくとも私がしてきた経験上はそうだった。

たとえば、もしも寝られたとしても、状況によつては低体温症で死んじゃうかもしれない。それほど水分は危険なの。

だからこそ、アウトドアウェアには揃える意味がある。

あの装備の全てが、過去からの人知の粋だから。

それは知識という武器を、経験というスキルを。服という防御力にして、未来の人の

命を助くんのだ。

私は考える。

例えばもし、私の持つ道具が誰かを助けるなら。

例えばもし、私の中の知識が誰かを助けるなら。

例えばもし、私の小さな勇気で誰かが助けるなら。

私はそれを惜しまずにいたい。私が人のためになれるのなら、その全力を出し切りたい。

私は今回の訓練でお姉ちゃんから知識や技術を学び、その中でしっかり自分と向き合っている。今はそんな気がする。

この考え方が、これが私の戦車道に成ればいいな。

私は、尊敬するお姉ちゃんがいる黒森峰女学園で変わりたい。なりたい私になるんだ。

前を歩くお姉ちゃんの背中、サラリと乾いて揺れるポロシャツを見ながら、そんなことを考えていた。

第7話

太陽が昇り始める。山の八合目まで登っただろうか。ここまで来ると木々の背丈が極端に低くなる。

山頂を見れば森林限界になっていることが分かる。この山は風衝地になっていることや高い標高による気温等の条件だからだろう。

しかし私たちは、訓練のための山籠りをしているため登山が目的ではない。

それでも頂上まで行きたかったな……。

名残惜しいが頂を背にするように私たちは森へ向かった。

それは置いておいて、お姉ちゃんの後ろをついて歩くと多くのことに気付かされる。知識や技術の多さにも驚くけど、およそ人のものとは一線を画す能力。それは論理的思考に基づく判断力だ。

まず気付かされたのは、山を歩いているのに、お姉ちゃんが下見もせず選んだ道は人が歩きやすく傾斜が緩やか。

また無理をせずともポイント毎の到着時間に秒単位の狂いしかない。

それよりも記憶に残った事があった。

ここからが西住まほという人物の真髓である。

私が歩いている最中に草木の少ない岩肌に辿り着いて、日陰だったこともあり寄りかかって休もうとしたんだ。

そうしたらすぐに「みほ、ここは危険だ。すぐに移動しよう(1)」とお姉ちゃんが言ったの。

次に続く言葉は、「だから自分勝手な人は好きになれなんだ(2)」だってさ。私の事かと思つてびつくりしたら、ああ、みほのことじゃないよとフォローも入れられた。

最初は全く意味が分からなかったから、お姉ちゃんにさっきの場所から何で離れたかったか聞く。

帰つてきた言葉は「あそこは良い岩陰だな。涼しいし虫も来ない(3)」

混乱のあまりしばらく考え込んだけど、私にはやっぱり分からなかった。

急かす姉に着いて歩き、その場を離れた5分後だろうか。何か音がして後ろを振り向くと、私たちのいた場所には切り出したような大きな岩が落ちていた。

私はお姉ちゃんに、最初から説明を求めた。なんだか不思議そうな顔をして私に話してくれた。

まず、先ほどの岩肌を覩てすぐに、チヨーク（炭酸マグネシウム）が付いていることに気付いた。つまりクライミングをするには良いスポットだと仮説した。（3）

そして頂上付近を見上げると岩肌に紛れて赤茶色の古い楔（ハーケン）がたくさん残されており、それは風によって微差だが揺れて見えた。

クライマーなら登りたくなるところを綺麗に、壊れないようにしておきたいから、ハーケンを回収出来ないなんてのは「自分勝手」らしい。（2）

更にはハーケンには、自分の全体重を預けるもの。それがぐらつくということは風による風化しか考えられず、ハーケン周りから細かい砂つぶが落ちて舞っているのを見た瞬間、そう遠くない時間に落石が起きてもおかしくはない。（1）

そう判断したんだって。

つまり、お姉ちゃんはその場所に着いた途端に得た情報を整理して（1）の言葉を言ったんだって分かった。

「お姉ちゃん。バケモノ染みてきてるよ」

「たまたま読みが当たっただけだ」

……私は恐ろしささえ感じた。それほどの知識量と思考の深さ。

彼女が私の敬愛する人で良かった。あの圧倒的な才覚に比べられたとしても、全く悔

しくはない。むしろ嬉しくもある。

しかし、裏を返せばつまり、彼女の周りにいる人達は……。そこでもう、考えるのはやめておいた。

他にも挙げればきりが無いが、全ては西住まほという指揮官による采配によつて、山籠りをしながら登山道を歩かないで山を越えるという無謀な行動を合理化させている。

全ては、観て聴いて感じ得た情報を頭の中で体系化し、論理的思考力でもつてその状況の最適解を導く。まさに鬼才。

……戦車道に関しては、そんなお姉ちゃんの考えることと同じことを実行したり、すぐに理解出来る私も結構すごいと思うけど。

—————

山を越える時に気になった事がある。

珍しく標高が高いところの木にも、所々にシカの食害痕が見て取れたこと。そしてその傷は深いということ。

樹木という植物は、幹にある皮を一周するように食べられると死ぬ。

どの木も例外じゃあなくて、植物が光合成で作り出した養分を運ぶには師管を通して送っている。

表皮の下にある形成層、その下には師管があり、それを一周するように剥がされれば、首と胴体を切り離されたと同じになってしまう。

シカはしばしば、樹木をそういう食べ方をするの。その条件としては、低い土地にも高い土地にも好きな草がなくなった時。

どうして好きな草が無くなるか、それはシカの個体数増加によって、その地域が生産出来る植物を食べ尽くし、限界を超えるから。

それほどシカは増えすぎている。近頃の北海道では、アーバンディアと言って山や森から市街地にまで下りてきて、農作物や林業のための木々を荒らすシカが問題化しているんだって。

彼らはただ、山での個体数が増えすぎて食べ物がなくなつたから、生き残るために移動しただけなのね。

このままでは森の生態系が壊れるから。

そう言う理由で猟師（ハンター）を増やして害獣（エゾシカ等）を駆除することで森林を守る。

これが人の手で、環境を管理することなんだって。そうやって人類や森林の未来を作

ることが目的。

「人にとつて都合の良い自分勝手な話だな」

お姉ちゃんはその言つたけど、その人たちのおかげで人が豊かに暮らせているのも事実か。つて納得してたみたいだった。

これからまた、夏独特の湿気を含んだ森の中を突っ切つて最終目的地である農村地帯の先、車でピックアップしてもらえほどの国道を目指す。

水の残量16L、お腹は二人ともペコペコ。そろそろ虫を食べることを視野に入れるとお姉ちゃんは神妙に言う。

私たちはあと1日の間に、もっと強くなつてしまふのだろうか。